



一貫コース通信

もう一人の「坊っちゃん」、夏目金之助に学ぶ

『親譲りの無鉄砲で子供の時から損ばかりしている。』

夏目漱石の代表作である「坊っちゃん」の冒頭である。江戸っ子気質の教師が、開国の影響を受けない日本の昔ながらの地方都市である愛媛県松山市に中学校の教師として赴任し、権力を持つ教頭の「赤シャツ」やその腰巾着の「野だいこ」による理不尽に対して、同僚の「山嵐」や「うらなり」と共に立ち向かうというものである。この物語においては、「坊っちゃん」の怒りや無鉄砲さ、そして正義感が「権力体制」に向けられており、当時の明治維新政府に対する不満や苛立ちも読み取ることができる。

実はこの物語の「坊っちゃん」は数学教師の設定であるのだが、このモデルとなっている（かもしれない）のは他にもない夏目漱石（本名：夏目金之助）本人である。文豪と名高い漱石も、かつては東京専門学校（早稲田大）、高等師範学校、中学校（愛媛）、高等学校（熊本）、東京帝国大学（東大）などで教壇に立った一人の“英語教師”なのである。

今回紹介したい本は川島幸希著の『英語教師 夏目漱石』である。20世紀末の2000年4月に初版として出された本書は、著者の境遇（漱石と同様東大文学部卒であり、英語教師を経て大学教授）が重なったことや出版への熱意により生まれた。内容もさることながら研究資料としてもたいへんな名著である。恥ずかしいことに、私自身がこの本を知ったのは昨年10月に本田哲朗校長からご紹介、お譲りいただいたことがきっかけである。夏目漱石については、「こころ」「坊っちゃん」「三四郎」「吾輩は猫である」「野分」「道草」などは、どこの図書館にも教科書にすら載るものであるため、読んだ経験は誰にでもあるだろうが、自分の職業である英語教師という共通点を軸に、夏目金之助という大先輩について考えることは、これまでなぜか一度もなかったのである。

大きな勘違いとしては、小説「坊っちゃん」の主人公である坊っちゃん（23歳）と、舞台となった松山での実際の夏目金之助とでは様々な面で異なる教師人生であったということである。坊っちゃんは権力者の赤シャツと衝突したり、初任として生徒からのからかいにあたりと、いかにも新米という感じであった。しかし夏目金之助は当時28歳であり、英語教師であり、東大卒の文学士ということで高給でもあった。特に、「漱石といえば、ご多分に溺れず、あばたが多かったことから生徒に『鬼がわら』というあだ名をつけられたが、しかし、すぐにその学問と識見の高さは彼らを圧倒した。」「ある生徒が漱石の訳に対して『辞書に違った訳があります』と質問したところ『そんなウソが書いてある辞書は直しておけ』と漱石は答えた。辞書ほど偉いものはないと思っていた生徒は度肝を抜かれ、『辞書を直す先生』ということで、漱石の評判は瞬く間に高まった」とある。しかし、単語の語源にまで遡り、精読を心がけた知的な授業で非常に高い評価を得ていたのにも拘わらず、松山の中学校を退任する際には、学生のストライキへの不満や生徒の学習意欲が低いことへの憤りを感じていたことも述べられている。

その後の漱石は生徒からは、厳しくも面倒見の良い教師と評価されていた。漱石は何しろ英文学専攻であったこともあり、シェークスピアの四大悲劇である「ハムレット」「オセロ」「マクベス」（「リア王」は散見されなかった）などから、当時のやさしめの教科書に至

るまで、生徒の学力に応じて臨機応変に使い分け、たいへん熱心に指導をしたらしい。当時、東京帝国大学の教授時代の学生からは『マクベス』を聴く。夏目先生の訳解は正確適切にして一点のあいまいな所なし。先生は非常に緻密な頭を持つて居らるゝやうに思はれた。(中略)先生の英文解釈は文法的に見てすばらしいものがある。」とのことであるが、不思議と読んでいて心が奮い立つ感覚を覚える。

当時は音声機器もなく、リスニングといえば試験官が声を出して読み上げたり、数学や物理を勉強するためには英語で書かれた本しかなく、学問を志すには今よりも英語が必須であったりと、現代よりも恵まれない環境においても、いやむしろ恵まれないからこそ人間の底力は発揮されたのかもしれない。

大正3年に、漱石は学習院で「私と個人主義」と題する講演をしている。その講演の中で漱石は教師時代を振り返り、自分は教師の資質に欠けていたし、職業としての教師に少しも興味もなく、英語を教えるのが面倒だったと語っている。一方で漱石は、生徒を叱りっぱなしの教師がもしこの世にいたら、その教師は授業をする資格がないのであり、叱るのと同時に骨を折って教えるのが当然だと言っている。そして「叱る権利をもつ先生は即ち教へる義務をも有つてゐる筈なのですから。先生は規律をたゞすため、秩序を保つために与へられた権利を十分に使ふでせう。其代り其権利と引き離す事の出来ない義務も尽くさなければ、教師の職を勤め終せる訳に行きませんまい」と結んだ。なるほど。教師として襟を正す思いである。

私事で恐縮だが、多忙を理由に、本書を読み終えた時には、気づけば年が明けていた。明治という激動の時代を英国への留学や文豪としての悩みを抱えながらも生涯を懸命に生きた漱石、何よりも英語教師という大先輩の教育理念に触れ、本の一冊もすぐに読めない自分はいかに怠惰なものかと痛感させられた。

2020年は、未知のウイルスに翻弄されるばかりの年であったが、2021年はこうはいくまいと誓う。